

A-14 幼児の食生活に関する研究(第11報) 最近5年間の都市近郊農村幼児の栄養状態の変動について 県立新潟女子短大 O岡田玲子・塚原 毅

目的 幼児の栄養指導に関してより適切な指針を得るために、新潟県下幼児の栄養摂取の実態を地域的な観点から把握すると共に、時代の流れによるその変動について調査し、幼児の食生活変容の諸要因の検索を試みてきた。今回は社会的変動に即応して生活環境の変化の見られた都市近郊農村の、最近5年間の幼児の栄養状態の変動について検討し、先に実施した山村幼児のそれにも照して考察したので報告する。

方法 調査地区は新潟市近郊の農村で、3~6歳児10名を対象として、昭和43年と48年における四季の各連続3日間(通年12日間)の食餌摂取量を個人別に秤量した。43年より5年後の変動指数を求め、さらに食品構成ならびに摂取栄養パターンの変動は、田村氏らの数値群パターン解析法を応用して変動度を算出し、比較した。

結果 (1)植物性食品は14品から20品に増えたが、動物性食品は4品でさしたる変動は見られなかった。(2)食品構成は豆、卵類が減り、油脂、淡色野菜、砂糖、芋、肉、乳類が増えて、基準量に対するパターン類似率(87→89)および基準パターンとの類似を低めている主要因(乳、肉、緑黄色野菜の不足)に若干の変動が見られたが、その差は有意ではなかった。(3)栄養充足率(%)は、熱量91→96、たん白質92→101、動物性たん白質68→86、脂肪102→105、Ca73→96、鉄118→103、VA60→57、VB₁77→87、VB₂100→86、VC134→178であり、所要量とのパターン類似率(97→96)および所要量パターンとの類似を低めている主要因(VAの不足、VCの多量)にはさしたる変化は認め難く、何れも山村幼児の5年間の栄養状態の変動と大差はなかった。